

ほっかいどう

かいはつグラフ

北海道開発局広報誌

Vol.49

2007 季刊



北海道開発グラフ

通巻第四十九号
二〇〇七年平成十九年十二月

発行 北海道開発局広報室

〒060-8521 札幌市北区北8条西2丁目 札幌第一合同庁舎
☎011(709)2331 内線五八二六 FAX 011(709)八九九五

開発の日々の
ひとコマ



函館港中央埠頭の工事風景

ケーソンの進水

昭和26年(1951年)の函館港湾事務所でのケーソン進水風景です。ケーソンとは、フランス語で「大きな箱」という意味です。鉄筋コンクリートで作った箱で、波を防ぐ防波堤や船を止めるための岸壁として使用します。

函館港では、完成したケーソンを専用の滑り台で海へ滑り落とし(進水)、海に浮かせ、設置する場所に引き船で運び、いくつも並べて海底に据え付けます。

函館港のケーソン建設施設は昭和62年(1987年)に廃止されています。

開発カレンダー 2008年1月~3月

12月23日~3月31日	滝野スノーワールド開園 (札幌市: 滝野すずらん丘陵公園)
1月 7日~3月14日	「わが村は美しくー北海道」運動 第4回コンクール応募受付開始 【申込先】各開発建設部 土地改良情報対策官
1月11日	100万人都市水土里のシンポジウム (会場: 札幌エルプラザ)
1月20日	バイオマスシンポジウム (会場: ベルクラシック帯広)
1月31日~2月 2日	2008ふゆトピア・フェア in 千歳 (会場: 千歳市民文化センターほか)
2月20日~2月21日	北海道開発局技術研究発表会 (会場: 札幌コンベンションセンター)
2月26日	バイオマスシンポジウム (会場: 北海道大学)

【今月の表紙】

屋根のある岸壁ー増毛港の暴風雪施設

増毛港は石材の積出港として、またエビ、ホタテ、イカなどの漁港基地として重要な役割を果たしています。この増毛港の中央ふ頭に平成15年に設置された防風雪施設は、屋根と採光窓のある壁で、雨や風や雪を防いでいます。これにより岸壁で行われる漁業作業が大幅に改善されました。特に風雪に悩まされる冬期間は、利用者を大いにサポートしています。また、この防風雪施設は、地域の各種イベントの会場としても活用、市民に親しまれる港湾施設となっています。

「かいはつグラフ」は北海道開発局のホームページからもご覧になれます。
<http://www.hkd.mlit.go.jp/topics/info/ippan/koho/graph/koshitop.htm>



「北海道開発グラフ」はエコマーク認定の再生紙を使用しています。

地域とともに／NPO法人「しりべつリバーネット」

(ニセコ町)

特集 ● 安全・安心の基盤づくり

ちょっとひといき…道の駅／京極町・室蘭市

グラビア／イルミネーションランド旭川

開発局の取組紹介／新たな計画の構成イメージと
今後のスケジュール

北国賦／「厄介者から資源へ」野生生物との真の
共生に挑む 曾我部 元親さん

開発事業のあゆみ／物流を中心とする多彩な機能を持つ
ウォーターフロント 函館港

ピックアップ／第4回JICA理事長表彰を受賞
新潟中越沖地震災害復旧支援活動の報告

お知らせ／ホームページをリニューアルしました。

特集

安全・安心の基盤づくり

資源の開発、食糧生産、地域経済の発展、環境の保全、観光振興などに努め、魅力と活力ある地域づくりのための社会基盤の整備に北海道開発局は取り組んでいます。今回は、安全・安心な暮らしをつくる「道路」「港湾」「農業」の3つの取組について紹介します。

パートI

一般国道230号虹田インター関連事業

一般国道230号は、道央圏（西胆振圏）道南圏の社会・経済・生活活動において極めて重要な役割を担うとともに、一般国道37号と有珠山の噴火前には年間708万人の観光客の入り込みを有した洞爺湖温泉街地区を連結し、観光産業や地域住民の生活を支えている広域幹線道路です。

しかし、平成12年3月31日、23年ぶりの有珠山噴火により、道路上に噴火口や断層が発生し、現ルートでの復旧が困難となりました。

た。このため、道道豊浦洞爺湖線、豊浦京極線の一部（約15km）を緊急的に国道に編入し、新たなルートを計画し整備を進めることになりました。

新ルートの選定に当たっては、有識者による「有珠山災害道路復旧委員会」を設立し、理学、工学の観点から技術的助言を受けながら、次の点に配慮して進めました。

- ①有珠山の火山活動からの回避（噴石、火砕サージ、火砕流に襲われる可能性のある区域を回避）
- ②国道としての機能を確保
- ③洞爺湖温泉街地区をはじめとする西胆振地域の早期復興と地域への支援
- ④避難路として活用することを重視

噴火から7年、様々な検討を重ね、関係機関や地域住民の方々の理解と協力のもと建設された新ルートは、平成19年3月28日に開通式を迎え、地域の復興及び支援を担う新たなルートとして供用を開始しました。

また、この事業に併せ、東日本高速道路株式会社（NEXCO東日本）で事業を進めてきた北海道縦貫自動車道の虹田洞爺湖インターチェンジ（IC）の移設（現ICから函館側に約2km）については、平成19年12月21日午前0時に供用を開始する見込みです。

この国道の新ルートの完成と高速道路のICの移設による整備効果としては、次の内容が挙げられます。

- ①国道230号新ルートや新虹田洞爺湖ICは、有珠山防災マップにおける火砕サージ被害想定区域外に整備しており、火山災害に強い広域幹線道路網を形成。
- ②洞爺湖温泉街へのアクセス向上による観光振興、緊急搬送や物流の時間短縮、通院・通学等地域生活の利便性向上に寄与することを期待。



一般国道230号 事業位置図



避難路としての機能をもつ三豊トンネル

当地域において、平成20年7月7日から9日までの3日間、「主要国首脳会議（北海道洞爺湖サミット）」が洞爺湖町で開催されます。

開発局とNEXCO東日本の連携の基に進められた今回の事業が今後の地域復興に大きく役立つことを期待しています。



平成12年3月 有珠山噴火時



平成19年3月28日 開通式（青葉トンネル入口）

苫小牧港の耐震強化岸壁整備

港湾整備事業では、貨物輸送や旅客輸送の効率化・輸送コスト削減、また港の安全・安心の確保と向上などのために、岸壁や防波堤などを整備しています。

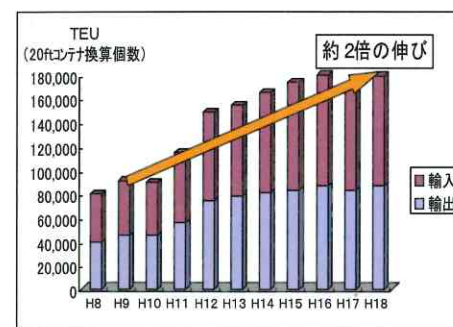
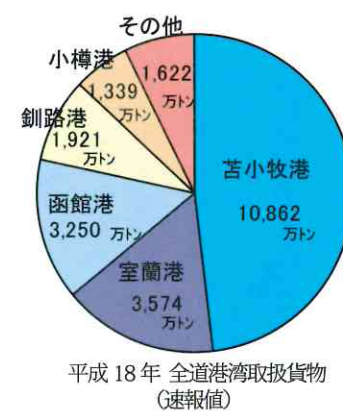
今回は、苫小牧港の耐震強化岸壁整備を紹介いたします。



苫小牧港航空写真

1. 苫小牧港の役割

北海道は四方を海に囲まれているため、海外や道外との貨物輸送は鉄道貨物や航空貨物を除いた大部分が港湾経由になっています。



苫小牧港 外資コンテナ取扱個数推移

2. 大規模地震発生時の港湾の対応

海上航路は、道路や鉄道のような陸上輸送ルートと異なり地震による被害がほとんどありません。このため、港湾には地震災害直後でも地震被害のない遠隔地から物資を搬入できる利点があります。また、港湾を利用する貨物船は、一度に数千トン以上の貨物を積む

ことができるため、食料等の緊急物資や災害復旧に必要な資材を短期間で大量に運ぶことができます。

ただし、阪神淡路大震災のような大規模な地震が発生した時には、耐震強化されていないほとんどすべての岸壁は大きな変形や移動が生じ、長期にわたり使用不可能となります。岸壁の耐震強化対策は前述の役割を果たすためには必須です。

3. 苫小牧港での大規模地震災害対策の事業

現在、苫小牧港には耐震強化岸



多目的国際ターミナル (耐震改良) 位置図 (苫小牧港東港区)

4. 耐震強化岸壁の通常時の役割

災害時に有効な耐震強化岸壁を通常時にも活用することで、より一層投資の効果を上げることができます。

苫小牧港の外資コンテナ貨物は年々増加してきており、平成18年の取扱量は20フィート(注1)コンテナ換算で17万9千個と過去10年間で約2倍に増加しました。この大幅な伸びにより、西港区に現在1バース(注2)しかない外資コンテナターミナルは、計画取扱量を大幅に超えて大変混雑しています。今回の整備により、東港区において耐震強化岸壁を含む連続

する2バースを有する外資コンテナターミナルが活用出来るようになるため、混雑緩和に大いに寄与することが期待されています。



外資コンテナ連続バース運用イメージ



入船国際コンテナターミナル混雑状況 (苫小牧港西港区)

注1：6.096m(1フィート=0.3048m)

注2：船1隻分の空間

最近の酪農事情と国営総合農地防災事業



サロベツ地域の乳牛

エソカンゾウ

サロベツ地域から利尻富士を望む

1. 最近の北海道酪農

道内120万haの農地の約半分は牧草を中心とした飼料作物が作付けられており、豊富な草地在活用した酪農経営は、牛の餌を自ら賄う割合も高く、安全・安心な牛乳・乳製品の生産に努めています。牛乳生産量は、378万トンと全国の約半分を占め、販売額も道内農産物全体の3割となっています。牛乳の消費量は、少子化の影響や緑茶・野菜飲料などに押され年々減少しているため、生産者や関係団体が協力して牛乳製品の消費拡大に取り組んでいます。道内では、酪農家が手作りチーズなどの生産に乗り出し、また、乳業メーカー各社も道内のチーズ工場の拡張を進め、消費者に好評なナチュラルチーズ等の生産を増やす予定です。

一方、北海道の酪農戸数は平成2年には15,000戸でしたが、

平成18年には8,600戸と、10数年で4割以上も減少しています。乳牛の頭数は85万頭前後で推移していますので、戸当たり飼養頭数は約50頭から約100頭へと倍増しました。規模拡大に伴って、労働力が不足がちになっていることから、近年では、牧草の刈り取りやふん尿散布などの作業を建設業者など外部で支援する農作業受託組織（コントラクター）が急速に増加しており、なかには、粗飼料の生産からTMR（注1）の調整・供給まで一元的に行う組織も設立されています。



大型機械による牧草の刈り取り作業（豊富町の牧草地）

2. 国営総合農地防災事業

「サロベツ地区」の実施

道北の豊富町を中心としたサロベツ地域は酪農業が盛んで、農地は低平地で泥炭土壌が広範囲に分布しているため、時間の経過によって不均等に沈下する現象が進行しています。降雨時や融雪時には農地に水が滞水するなどの被害を受けるとともに埋木（注2）の浮き上がりが発生しているなど、農作業と農業生産に大きな障害をもたらしています。

このため、排水不良による牧草の生産量低下を回復し、大型機械を利用した効率的な収穫作業等が可能となるよう、平成19年度から国営総合農地防災事業「サロベツ地区」により、排水路整備や暗渠排水（注3）などの工事を実施します。

3. 上サロベツ自然再生

協議会との連携

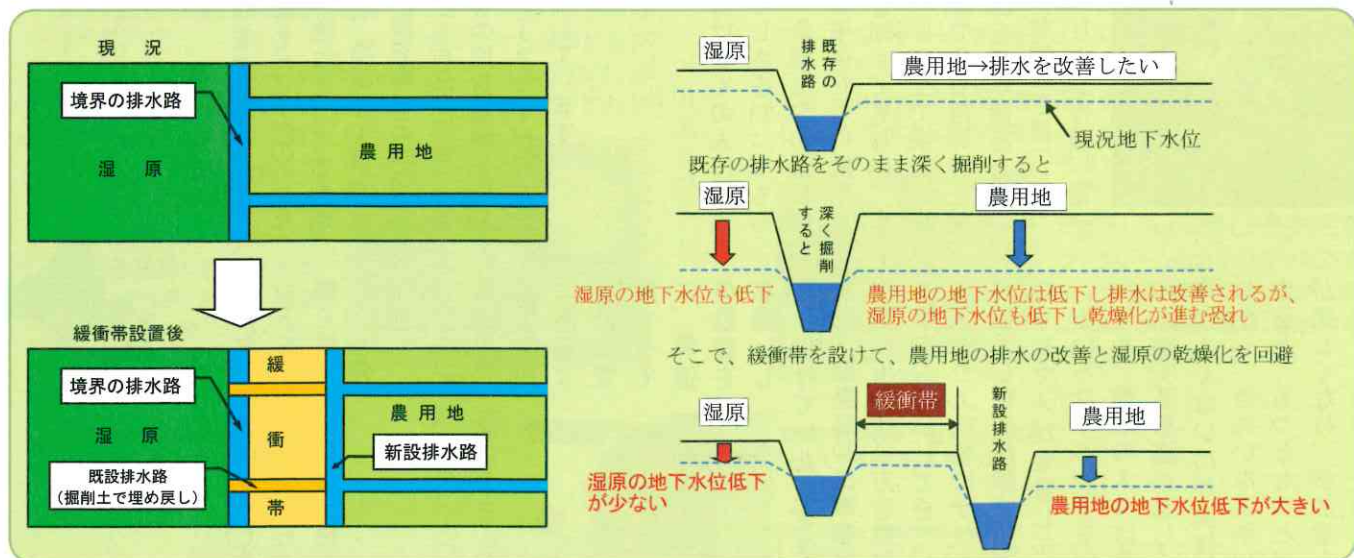
一方、サロベツ湿原は、我が国最大の高層湿原で、イトウやタンチョウなど全国でも貴重な動植物の生息する自然環境が残っていますが、地下水位の低下や乾燥化により湿原面積の減少が生じています。

北海道開発局では、湿原の保全・再生と農業の共存を図るため、土地改良事業として全国で初めて環境省と連携して地下水調査や植生調査などの各種調査、検討会などを実施しています。また、地域では自然再生推進法に基づく「上サロベツ自然再生協議会」を設立、平成18年7月には「上サロベツ自然再生事業 農業と湿原の共生に向けた自然再生実施計画書」を作成しました。

この計画を踏まえてサロベツ地区の工事は、湿原の地下水位低下の抑制、土砂流入の軽減を図るため、農地と湿原が直接隣接している場所に緩衝帯（注4）を設置、湿原に流入する農業用排水路に沈砂池（注5）を設置します。

4. おわりに

豊富町で生産された牛乳は、コンビニなどを通じて全道で販売され、地域ブランドとして高く評価されています。粗飼料の自給率を高め、安全・安心な牛乳を提供し、また、貴重な湿原環境を保全していくために、これからも地域の関係者とともに取り組んでいきます。



湿原保全（緩衝帯）のイメージ

注2：土中に埋まっている木
注4：地下水位の低下を緩和させる区間

注3：農地の過剰な水を抜くため、土中に穴の開いたパイプを埋める工法
注5：上流から流れてくる土砂などを一時的に溜める池

注1：牧草などとトウモロコシなどを混合したエサ

道の駅

ちょっとひといき・・・

道央ブロック！

京極町のふきだし公園に「道の駅」がオープン！
今回は5月にオープンした「名水の郷きょうごく」と東日本で一番長い吊り橋、白鳥大橋のある「みたら室蘭」です。



名水の郷 ぎょうごく

<道道京極俱知安線沿い 京極町> 平成19年5月1日オープン

羊蹄山麓のまち



自然に囲まれたコテージ風の建物

道の駅「名水の郷きょうごく」は、札幌から国道230号を経由して車で約2時間、京極町市街地から道道京極俱知安線を3分ほど行ったところにあるふきだし公園にあります。公園内には、名水プラザをメインに、芝生広場、東屋、展望台や遊具などがあります。また、環境省の日本名水百選に選ばれた「羊蹄のふきだし湧水」を自由に汲んで持ち帰ることができる施設が併設されています。ふきだし湧水は、羊蹄山に降った雨や雪が数十年の歳月を経て地下に浸透し、湧水となったものです。水質はまるやかで軟らかくとても飲みやすい水です。1日に約8万トンの



おみやげコーナー

水量があることから、一年中湧水を汲む人の姿が絶えることはありません。名水プラザにはレストラン、売店などがあり、湧水を利用した山菜ラーメンや山菜そばなどが味わえます。特に厚切りジンギスカンは人気メニューの一品で、団体のお客さんからは予約も入るそうです。寒い時期には熱々の鍋焼きうどんも加わります。豆の味・香りを引き立ててくれる名水コーヒーもおすすです。デザートにはコーヒープリンがドライブの疲れを癒してくれます。また、地場特産品の展示販売コーナーには湧水を使用した京極名水コーヒー（ポトル入）や銘酒「京極」、銘菓「名水の里」などの販売もしています。



そばセット 780円

虻田郡京極町字川西45番地1
TEL 0136-42-2292



みたら室蘭

<国道37号より道道臨海道路祝津絵鞆線沿い 室蘭市>

風力発電のある駅



シンプルな建物の後方には巨大な風車と白鳥大橋

道の駅「みたら室蘭」は、国道37号から室蘭港の港口部に架かる白鳥大橋を渡り、道道臨海道路祝津絵鞆線のループ橋を下りたところあります。白鳥大橋建設の歩みを資料などで紹介している白鳥大橋記念館が、平成10年6月の白鳥大橋の開通とともに道の駅として登録されました。白い壁のシンプルな建物の1階展示室では、白鳥大橋の設計から完成までの貴重な実験資料やパネル、模型、実際に使用された太さのワイヤーロープの見本や写真などがあり、2階の展示室では室蘭港の「過去」「現在」「未来」がジオラマ展示されています。展望バルコニーからは、白鳥大橋、大黒島、遠くは有珠山、昭和山、さらには羊蹄山も望めます。また、施設後方には直径3.8mと5.8mの2基の風車があり白鳥大橋の照明、施設の電力供給などに利用しています。



室蘭名物のおみやげ

1階のラウンジには喫茶など休憩スペースがあり、室蘭名物のカレーラーメンや焼き鳥のたれなどが販売されています。なかでも、ボルトやナットなどを使った人形の「ボルタ」が人気です。また、牛乳たっぷりココのあるソフトクリームは、観光シーズンには一日に約800個も売れるそうです。2階の資料館を見学していた荒木さんにお話を聞くと、家族サービスで神奈川県から来て、道東を回り苦小牧から帰途につくとのこと。「資料館が道の駅というのは珍しいですね。ソフトクリームもおいしかったですよ」と笑顔で答えてくれました。周辺には、水族館、温泉、屋台村など家族で楽しめます。



神奈川県から来た荒木さんご家族

室蘭市祝津町4丁目16番地15号
TEL 0143-26-2030

「スタンプラリー 2007」の賞品対象ラリーは2007年11月3日（土）で終了しましたが、全駅完全制覇の認定は続きます。全駅完全制覇「複数年コース」の認定申込期間は、2006版スタンプ帳は2008年3月31日まで、2007版スタンプ帳は2009年3月31日までです。

詳細は、北海道開発局のホームページからご覧いただけます。http://www.hkd.mlit.go.jp/zigyoka/z_doro/station/index.html

地域と ともに

健全な流域自治を目指して！

NPPO法人「しりべつりバーネット」(ニセコ町)



グループに分かれての植林作業

平成8年に設立され、12年にNPPO法人となった「しりべつりバーネット」は、尻別川流域における水環境の保全と創造、地域の歴史や文化等を通じ、地域と産・官・学のコミュニケーションを深め、健全な流域社会の形成、豊かな流域自治を目指し、尻別川のクリーン作戦やせせらぎまつり、雪中植林などのイベント活動を行っています。

また、開発局の提唱する地域住民と行政が連携して魅力ある観光空間づくりを目指す、シーニックバイウェイ北海道での特色のある地域づくりにも取り組んでいます。さらに流域の発展のために、平成18年11月に尻別川連絡協議会、小樽開発建設部、後志支庁などと「尻別川流域シンポジウム」を開催するなど様々な活動を行っています。

●きれいな水と森を創る運動
雨や雪解け水を蓄え、浄化

●リバーズスクール
川の楽校
できるだけ多くの人に尻別川の素晴らしさを知ってもらうために、魚取りや川遊び体験を通して子供たちに尻別川の生態系を知ってもらい、また子供たちに安全で楽しい川遊びを指導できる指導者を養成する講座を毎年実施しています。また、せせらぎまつりや、尻別川のクリーン作戦、雪中

平成8年に設立され、12年にNPPO法人となった「しりべつりバーネット」は、尻別川流域における水環境の保全と創造、地域の歴史や文化等を通じ、地域と産・官・学のコミュニケーションを深め、健全な流域社会の形成、豊かな流域自治を目指し、尻別川のクリーン作戦やせせらぎまつり、雪中植林などのイベント活動を行っています。

●尻別川のルールづくり
尻別川は、古くから釣りのメッカとして知られ、幻の魚といわれるイトウが生息する豊かな川ですが、近年はラフティングやカヌーなどの新しいレジャーを楽しむ人も増え

して川に水を供給する森は、人の生活はもろろんのこと、様々な生き物にとっても大切な資源です。地域の人が力を合わせて「森を育てる大切さ」を学ぶことを目的に、ニセコ町の道有林の旧苗畑地を借り受け、リバーネットが5年計画で植林をしています。

植林など環境に配慮したイベントを手がけ、清流日本一に輝く尻別川の啓蒙活動を行っています。



尻別川で遊ぶ子供たち



カヌーを使っているゴミ拾い



常務理事 工藤達人さんのお話



ニセコ町

イルミネーションランド旭川

「凧」として寒さの中で繰り広げられる光のページェント、旭川「街あかりイルミネーション」。JR旭川駅前の「イルミネーション駅彩灯」に始まり、「ナナカマド」（緑橋通）、「フレンドリー」（平和通買物公園）、「ウェルカム」（昭和通）と名付けられた3つのイルミネーションが平行に走り、フレンドリーとウェルカムのイルミネーションはロータリー・タワー・イルミネーションで結ばれます。ここからライトアップされた旭橋に向かって「旭橋通イルミネーション」が続きます。

寒気が増すほどに、光までが輝きを増すような「街あかりイルミネーション」。

開催期間は平成19年12月1日から翌年の2月15日まで。



【旭川街あかり計画】

平成7年度から旭川駅前から旭橋にかけての市内中心部にて、旭川街あかり実行委員会（構成員：旭川観光協会、旭川市、旭川商工会議所、旭川開発建設部など）により、市民や観光客に親んでもらえる、個性的で魅力的な冬の夜間景観を創出しています。

旭川開発建設部は、国道40号常盤ロータリー・タワー・タワーイルミネーションを実施しています。

今後の北海道開発の戦略的目標

1. アジアに輝く北の拠点～開かれた競争力ある北海道の実現

- 豊かな自然環境や冷涼な気候が生み出す魅力が強みとなる食関連・観光産業は、東アジア市場における競争力を確保し得る
- 東アジアの急成長を好機ととらえ、これらの産業を核としつつ、東アジアや世界と競争し得る成長期待産業の育成及び戦略的な条件整備、基盤となる食料供給力の強化

2. 森と水の豊かな北の大地～持続可能で美しい北海道の実現

- 豊かな自然環境を国民共通の資産として将来に継承、美しい四季の風景等を保全・創出して雄大な自然の恵みを体感できる北海道づくり
- 地域資源（自然エネルギー源等）を活用した低炭素社会、循環型社会の構築に向けた先駆的取組

3. 地域力ある北の広域分散型社会～多様で個性ある地域から成る北海道の実現

- 北海道内の各地域において、優れた特色ある地域資源を活かした地域づくり
- 札幌を中心とする都市圏の機能により北海道全体を牽引、地方都市圏と周辺の人口低密度地域から成る広域的な生活圏において人口減少・少子高齢化に対応した地域社会モデルを構築

計画の進め方

戦略的目標を達成するため、以下の3つの視点に立ち総合的に5つの主要施策を推進

多様な連携・協働

新たな時代を見据えた投資の重点化

新たな北海道イニシアティブの発揮

計画の主要施策

1. グローバルな競争力ある自立的安定経済の実現

- 食料供給力の強化と食にかかわる産業の高付加価値化競争力強化
 - 食料供給力の強化
 - 食の安全の確保
 - 食にかかわる産業の高付加価値化・競争力強化

- 国際競争力のある魅力的な観光地づくりに向けた観光の振興
 - 国際競争力のある魅力的な観光地づくり
 - リーディング産業としての観光産業振興

- 東アジアと共に成長する産業群の形成
 - 地理的優位性を活かした産業立地の促進
 - 強みを活かした産業の育成
 - 産業育成に向けての条件整備

2. 地球環境時代をリードし自然と共生する持続可能な地域社会の形成

- 自然共生社会の形成
- 循環型社会の形成
- 低炭素社会の形成

3. 魅力と活力ある北国の地域づくり・まちづくり

- 広域的な生活圏の形成と交流・連携強化
- 都市における機能の強化と魅力の向上
- 人口低密度地域における活力ある地域社会モデルへの取組
- 多様で個性的な北国の地域づくり

4. 内外の交流を支えるネットワークとモビリティの向上

- 国内外に開かれた広域交通ネットワークの構築
- 地域交通・情報通信基盤の形成
- 冬期交通の信頼性向上

5. 安全・安心な国土づくり

- 頻発する自然災害に備える防災対策の推進
- ハード・ソフト一体となった総合的な防災・減災対策の推進
- 道路交通事故等の無い社会を目指した交通安全対策の推進



平成20年3月目途
新たな北海道総合開発計画 閣議決定(予定)

開発局の取組紹介

新たな計画の構成イメージと今後のスケジュール

北海道総合開発計画は、今後の北海道開発の向かうべき方向を示す重要な計画です。平成19年4月、冬柴国土交通大臣から新たな北海道総合開発計画の策定について諮問が行われ、現在、新たな計画の策定に向けた検討が進められています。

現在、広く国民の皆様からのご意見を募集(パブリックコメント)しています。なお、新たな計画に関する策定状況やパブリックコメントの募集については、国土交通省ホームページ(<http://www.mlit.go.jp/hkb/newplan/index.html>)にてご覧になれます。

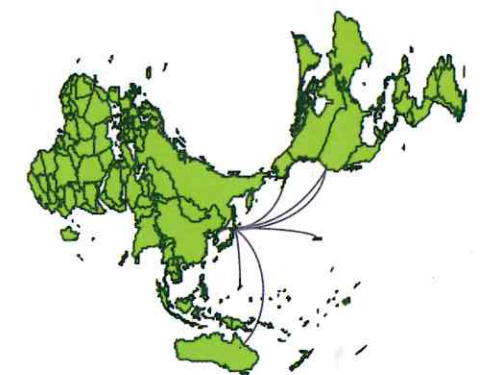
新たな計画の構成イメージ

我が国を巡る環境変化と国家的課題

- グローバル化の進展
(東アジア地域の急速な経済成長への対応等)
- 生存基盤そのものを脅かす地球環境問題
(地球温暖化問題の深刻化、国際的なエネルギー資源の獲得競争の激化等)
- かつて経験したことのない規模の人口減少と急速な少子高齢化
(人口減少により地域社会の過疎化が進行し、活力の低下が懸念)

北海道の資源・特性

- 【アジアの中でも特徴的な北海道の資源・特性】
- ゆとりある空間
(人口密度は全国の約1/5)
 - 広大な農地、豊かな漁場
(全国の耕地面積の約1/4、漁業生産量の約1/4)
 - 自然環境
(良質で豊富な水、全国の森林面積の約1/4、湿地面積の約8割、四季が明瞭で美しい風景、冷涼な気候)
 - 風力、バイオマス等の自然エネルギー源
 - 極東ロシアに隣接、北米及び東アジアとの結節点に位置



新たな計画の方向性

北海道の資源・特性を活かし、我が国が直面する課題の解決に貢献していくとともに、地域の活力ある発展を図る。

- 食、観光など北海道の強みを活かし、産業の競争力を強化
- 北海道の豊かな自然環境を保全・再生するなど、経済と環境が調和した持続可能な地域社会の形成をリード等



「厄介者から資源へ」 野生生物との真の共生に挑む

阿寒エゾシカ研究会 会長

曾我部 元親

Sogabe Motochika



双岳台付近から望む雄阿寒岳と雌阿寒岳



エゾシカ (阿寒町)

釧路市阿寒町で砕石業を営む父と商店を営む母の長男として生まれ、一時は札幌に出ていました。がリターン。コンビニエンスストア店長として勤務する傍ら地元商工会青年部に入部、その後同部長を経て1995年5月に釧路管内商工会青年部連合会会長に就任、地域活性化に正面から真剣に向き合う立場になりました。バブル崩壊後の厳しい時期での就任でした。

「自分は何かできるのか」と試行錯誤する日々が続くなか、ある言葉が私に衝撃を与えました。今では誰もが知っている「スローフード運動」という言葉です。イタリアのプラという小さな村で生まれたこの運動は、地域の食文化や職人を守り、郷土料理の風味と豊かさを再発見するための運動です。これこそまさにわれわれの地域に必要なものと感じたのです。

釧路管内の各部長に話を持ちかけ、2002年9月に第1回スローフードフェスタを白糠町で開催しました。このイベントには、永年漁師の家庭料理として食されてきたものなど、その地域に住む人々で自ら食べたことのない料理が並び、成功を収めました。しかし、漁師の家庭料理は、少量しか取れないものや鮮度的に商品として出すことのできないものを利用することが多く、ビジネスにつながるものではなかったのです。また、親の世代では美味しく感じるものも、子供たちにとって美味しくないとは限らないこともショックを受けました。日本の食文化は大きく変化していました。若い世代の家庭では、ファーストフードやコンビニ弁当が食卓に並ぶことも珍しくありません。ある意味、すでに守るべき食文化が崩壊していることに気付かされたのです。



「赤いベレー」で販売されているエゾシカバーガー

そこで、地域の食材で子供たちが喜ぶものを作ろうと考えました。地元で地域食材を率先して使用しているシェフを訪ね、地域食材での「ハンバーガー」を依頼したところ、シェフから「メインとなる肉にはエゾシカを使いましょう」という衝撃的な提案が出されたのです。

それまで、エゾシカといえば農林被害や交通事故を起こす「厄介者」として、阿寒町だけでも毎年千頭以上が駆除され、その処理費用に町は頭を悩まされていた

した。しかし、シカ肉は欧州やオセアニアでは市民権を得た高級食材です。間違いなくビジネスになると直感しました。

「エゾシカバーガー」は、釧路市で2003年11月に開催された第2回スローフードフェスタに登場しました。不安と期待が交差する中、用意された100個はなくなりました。アンケートでは9割の方が「美味しい」と答えてくれました。予想以上の結果に確かな手ごたえを感じ、一気に産業化に向けて動き出すこととなりました。

原料となる鹿肉の入手方法や捕獲した鹿の飼育技術、さらには解体加工の処理マニュアル、販売に向けたマーケティングなど、問題と向き合う日々の連続でした。しかし、町の協力のもと、猟友会、森林財団、建設協会、旅館組合、商工会などを構成員とし、産業化に向け、風上から風下までの流れを構築できる「阿寒エゾシカ研究会」を2004年3月に立ち上げ、長年この問題に取り組んできた北海道やエゾシカ協会等との連携によって、それら難題を次々に解決することができました。

スープカレーやシチュー、また観光土産として乾燥した鹿肉フレークを混ぜた「鹿煎餅」も開発しました。今後は鹿皮や鹿角を活用した製品開発にも取り組むたいと考えています。

増え過ぎたエゾシカを有効に活用することで、地域経済が活性化され、農林被害も抑えることができる「野生生物との真の共生」に挑むだけの価値はあると思います。



Profile プロフィール

曾我部 元親 (そがべ もとちか)

1966年 釧路市阿寒町出身
北泉開発㈱ 取締役
(有)阿寒グリーンファーム 取締役
阿寒エゾシカ研究会 会長
釧路市議会議員
阿寒町商工会青年部 相談役
(社)エゾシカ協会 理事
エゾシカ食肉事業協同組合 副理事長
北海道エゾシカ有効活用検討委員会 委員

北泉開発㈱ TEL 0154-66-3508 FAX 0154-66-3114



鹿肉の解体加工の様子

函館港

物流を中心とする多彩な機能を持つウォーターフロント



函館山から望む函館港

横浜、長崎とともに、我が国最初の貿易港として開港した函館港。昭和26年（1951年）に重要港湾に指定され、北海道と本州及び海外を結ぶ物流拠点として、道内産業の発展に大きな役割を果たしてきました。さらに、「観光」や「食」、「憩いの場・交流の場」など多彩な機能を併せ持つウォーターフロントとしての整備も進んでいます。

我が国最初の貿易港

函館港は津軽海峡に面し、古くから天然の良港として知られてきました。安政2年（1855年）3月外国船への薪水（まきと水）、食料の補給港として指定され、安政6年（1859年）6月には修好通商条約締結により横浜、長崎とともに我が国最初の貿易港となりました。国際貿易港としての性格に加え、明治6年（1873年）には開拓使によって函館（青森間）に定期航路が開通され、本州と北海道を結ぶ要衝（交通の重要拠点）となりました。

明治29年から始まる近代港湾への整備事業

函館港では、明治12年から港湾調査に着手し、明治23年（1890年）から5年間は、北海道庁技師の廣井勇らが港湾調査を行っており、以来着々と港湾整備が進められてきました。函館港の近代港湾としての歴史は、明治29年（1896年）の「第



「北洋漁業」が盛んな時代の船団出港

1期函館区宮改良工事」からスタートします。港内浚せつ及び防砂堤、船入瀬（船を留める場所）の築設など本格的な築港工事の第一歩を踏み出しました。さらに、北海道第1期拓殖計画により、西防波堤と防砂堤2基を築造。これによって静穏な水域が拡大され、また接岸施設も整えられ、湾岸の開発も海岸町から七飯浜方面へと拡大されていきました。第2期拓殖計画では、西防波堤の

増設と北防波堤の新設、さらに海岸町地先にふ頭新設が計画されましたが、太平洋戦争のため大半の工事は戦後に持ち越されることとなります。戦後は昭和26年（1951年）に重要港湾に指定され、翌年には北洋漁業が再開されます。その後の函館の造船、製鋼、セメント、石油化学など、基幹産業の進展は目覚ましいものがありました。昭和36年（1961年）に第1次港湾整備5か年計画が発足し、西防波堤、北防波堤の外かく施設が整えられ、係留（船をつなぐ）施設としては中央ふ頭、北浜ふ頭、木材取扱施設及び万代ふ頭が整備されました。

物流拠点としての港町ふ頭が平成14年に供用開始

函館港での貨物取扱量は北海道全体の約15%を占め、青函連絡船が廃止された後も、道南はもとより道央等北海道全体の農林水産品の運搬などの物流を支えてきました。また、道路災害などの非常時に日々の生活に支障が出ないようにするための、海上ルート確保においても函館港の役割が期待されています。万代ふ頭や中央ふ頭は昭和40〜50年代に作られた古いふ頭でしたが、



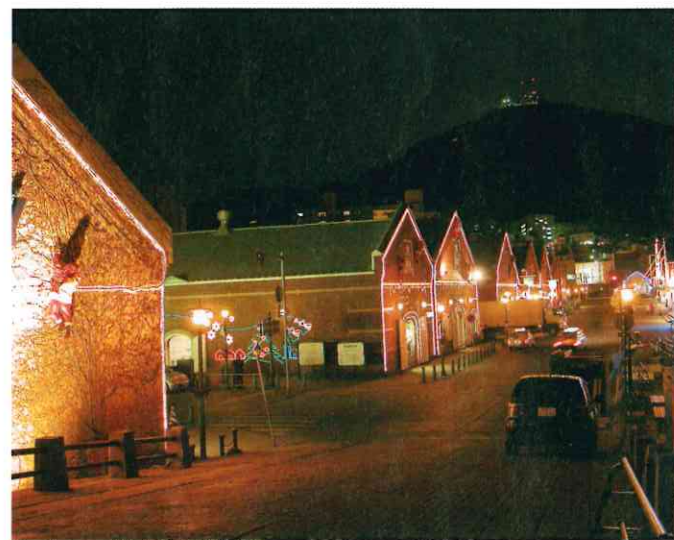
昭和44年 函館港

平成14年（2002年）5月には、水深14m岸壁を有する大型ふ頭として港町ふ頭が供用を開始。このふ頭では大型の多目的クレーンを設置し、現在、物流の主流となっているコンテナ貨物も取り扱えるようになっていきます。歴史的な建造物が多く残る西部地区（大町・末広地区）には、遊歩道を設置した石積みみの物揚場、護岸を整備。荷役ベース（船の停泊場所）だけではなく、ウォーターフロント整備にも力を入れています。また、函館駅の北側に旅客船ふ頭も計画しています。

函館の魅力アップに向けた多彩な函館港の役割

函館港は物流だけではなく観光や憩いの場としても多彩な機能を持ち、それぞれの魅力アップに向けた取組を進めています。函館市は道南から道央や道東へ向かう観光経路の拠点であり、函館港は年間約500万人の函館観光の顔になっています。金森倉庫、摩周丸やシーポートプラザ周辺の函館港ベイエリアでの買い物、散策を始め、函館山や西部地区の丘からの眺めも、港を中心とした眺望となっています。

さらに、函館港には水産物の市場があり、水産物を取り扱う港としても知られ、地元の人々の食を支えるとともに、湯の川など函館を訪れる観光客の「新鮮でおいしい水産物をぜひ函館で食べたい」という要求を満たしてくれる場でもありません。また、「緑の島」は、船の泊地を掘る際に出た土で埋め立てた用地で、スポーツ、家族での釣り、市民の方々の散歩などで賑わいをみせるなど、食と憩いのエ



ライトアップされた金森倉庫

リアとしても大きな役割を果たしています。いま函館港は、国内外をネットワークする物流拠点としての機能だけでなく、ウォーターフロント開発やクルーズ船の増加などを踏まえ、市民や観光客にも魅力ある港湾として、函館のまちづくりの中核的な役割を担いながら発展を続けているのです。

参考文献

○ 函館市史（編集・発行 函館市）

お知らせ

北海道開発局のホームページをリニューアルしました！是非ご覧下さい。

北海道開発局ホームページは、通行止め情報や道の駅に関する情報、入札・契約情報など、皆さまが必要としている情報をわかりやすくご覧いただけるよう、この度、リニューアルしました。

北海道開発局ホームページに関するご意見・ご要望について

今後もより良いホームページにするため、ご意見・ご要望等がございましたら、アンケートにご協力をよろしくお願いいたします。お寄せいただいたご意見を参考にホームページの改善を図ってまいります。

《北海道開発局ホームページ》

<http://www.hkd.mlit.go.jp/index.html>



ご意見どうもありがとうございました。いたただいたご意見等については、今後の広報誌づくりに活かしていきたいと考えています。

(東神楽町 30代男性)

初めて拝見しましたが、地域における開発局の役割を伝える手段として評価したい。

(兵庫県明石市 30代女性)

「地域とともに」には、地域の人々と生活が分かりやすかったです。道の駅もおすすめの食べ物写真で写っていたので分かりやすい。パネルディスプレイは少し難しいですが、良く読むと理解できる内容でした。

豊平峡ダムの記事が迫力があって良かった。社会実験の記事は分かりづらく難しい。(札幌市 30代男性)

「地域とともに」のコーナーは、理解しやすく興味もてるものです。地域密着、このスタンスは今後も重要。(札幌市 60代男性)

ひろば

48号アンケート
はがきから…

本誌へのお問い合わせは

「ほっかいどうかいわつグラフ」へのお問い合わせの方は、下記までご連絡ください。

連絡先
北海道開発局 開発監理部広報室広報第2係
札幌市北区北8条西2丁目
札幌第1合同庁舎
Tel 011-709-2311 内線 5816

編集後記

表紙の写真は増毛(ましけ)町にある増毛港を撮影したもので、北海道の北西部にあり、札幌から車で約2時間半の位置のところにあります。増毛町の町名の由来は、付近の海で鱈(ニシン)が多く取れ、海一面にカモメが飛ぶことから、アイヌ語で「カモメが多いところ」という意味の「マシユキニ」または「マシユケ」が転じたものと言われています。増毛駅の周りには日本海の風雪に耐えた石造りや木造の歴史的建物が並び、平成13年に北海道遺産に選定されています。さらに、増毛町はサクランボやリンゴなどの果物の北限地で、特産の甘エビ漁獲高は全国有数となっております。それと、なんとといっても明治15年創業で100年の歴史のある、そして日本最北にある造り酒屋の國稀(くにまれ)酒造が増毛町にあるということは、日本酒好きの方には必須でしょう。最北の蔵らしく辛口でキレのある味で、私を含め多くの方に飲まれていると思います。これから年末年始にかけて飲む機会が増えますが飲み過ぎにはくれぐれも気を付けましょう！(K)

12月23日 滝野スノーワールド開園!

遊びにきてね!

ももたん きのたん

豊滝野すずらん丘陵公園
札幌市南区滝野247番地
冬期(平成20年3月31日まで)は入園料が無料!
(注 駐車場、リフト等は有料です。)

北海道開発局は第4回JICA理事長表彰を受賞しました。

北海道開発局は、JICAが行う国際協力業務への貢献、協力を評価され、第4回JICA理事長表彰を受賞しました。北海道は明治時代から始まった総合開発の結果、人口約560万人、域内総生産約20兆円の地域へと発展し、世界的に見ても地域開発の成功例であると言われています。こうした開発の経験を、発展途上国の政府職員に学んでもらうという目的で、平成4年度から海外からの研修員受入れを始め、現在まで57か国から670名を受け入れています。



表彰式

参加した研修員は、北海道開発の仕組みや成果などを学び、研修の成果を自国で活用していると連絡してくれた方もいます。今後とも北海道総合開発の経験を活用した国際協力を積極的に進めていきたいと考えております。



研修員による発表会



桂沢ダムを視察

新潟県中越沖地震災害復旧支援活動の報告

平成19年7月16日に発生した新潟県中越沖地震で、大きな被害を受けた新潟県柏崎市の道路などについて、市が行う復旧手続きを支援するため、全国の地方整備局及び北海道開発局が支援班を派遣しました。支援期間は7月30日～8月10日で、函館・室蘭開発建設部の各5名が被災現場での状況調査や記録、写真撮影などを行い、それをもとに復旧のための図面を作成する等支援活動を行いました。



測量などの現地作業

図面作成などの内業

支援班からは、「最高気温が39℃という猛暑の中の仕事でしたが、任務を果たせて光栄です。」との感想がありました。

